

木枯らしと時雨

晩秋から初冬を代表する風物詩に木枯らしと時雨がある。低気圧が発達しながら日本海からオホーツク海に抜けると、大陸で溜まり始めていた寒気が誘い込まれたように南下し、秋一番の寒波が日本列島を吹き抜けると木枯らし1号の襲来となる。木枯らし揺れる木々の枝々枝の動き、散り流れていく落ち葉の舞うことを見て、見える大気の流れ、風を見ることができる。

風が木々の細枝を揺らし電線を振動させて渦を作りヒューヒューと音をだす。人が聞くことができるカルマン渦であり、「虎落笛（もがりふえ）」となつて風を聞くことができる。気象衛星の写真をみると、大海に浮かぶ弧峰、チエジユ（済州）島や利尻島の風下側に2列の雲の渦の列が並び、カルマン渦の雲の渦を通して見える風を見せてくれる。島のサイズが大きく周期が1時間から数時間と長く残念ながら人の耳では聞くことができない。

春一番が冬の季節の一瞬のゆるみを突いた春の使者で華やいだ響きがあるのとは対照的に、木枯らし1号はミヅレ混じりの時雨で日本海側の地方を低く暗鬱な雲で覆い、来るべく冬を予

感させる静寂と厳しい響きを持っている。平安末期、官僚政治、摂関政治が行き詰まり院政を巻き込んだ内紛に、源平の武士の勃興、盛衰という混沌流転の狭間で懊惱して出家、隠棲した西行の寂寥さの背景に、ことのほか木枯らしと時雨がよく似合う。

時の最高権力者、鳥羽上皇の信頼厚い北面の武士、蹴鞠でも流鏑馬でも一頭抜きんでていた風流人でもあり後に当代随一の歌人といわれた北面のエリート、佐藤義清が二三歳の若さで突然、出家遁世して西行と号し、京都嵯峨野の奥深き草庵にこもり隠棲した。

辻邦生の「西行花伝」（新潮社）の序の章で「あの人ことを本当に書けるだろうか。・・・円位上人、西行のことを。しばらく前から時雨が檜皮葺きの屋根を鳴らしてすぎてゆく。その幽かな音を聞いていると、そんなことはとても無理だ」と西行を師と仰ぐ藤原秋実に語りはじめさせた。

「時雨のなかで紅葉を深めてゆく木々の梢を見ても、晩秋の山の背をこうこう鳴らして過ぎてゆく夜の風を聞いていても、何とこの世は心に染みるよきものに満ちているのか」と文にしたためた西行。現世を浮島のように眺め、それを虚無と感じつつも、現世が好きなのに、現世を捨てて、奥州の霸者、藤原氏の見極めのみちの

くへの旅にでる。西行となつて足を踏み入れた

陸奥の旅は、秋は荒く、空は冷たい色が加わり、時雨が木々を鳴らした。木枯らしで散った落ち葉を踏み入った山道はまでの黄葉で敷きしめられていた。北の黒ずんだ森に鳴る風の音に耳を傾け、水雨の打つ峠を越えた。

西行が隠棲し始めた頃に庵を営んだ京都、嵯峨野は、若狭湾から丹波越え降り渡った時雨でよく知られ、北山時雨が古都の風物詩となつてゐる。晩秋から初冬にかけて、シベリア寒気が暖かい日本海を吹き渡ると、こぶりの入道雲のようなひと塊の積雲でなりたつ雲の帯が幾筋も幾筋も出来る。次々に襲来する雨雲の通過で降っては止み晴れ間がのぞき、また、さあつと濡れるほどになる。昼夜の別なく、急な雨が襲来し、たちまち降るかと見れば、たちまち晴れる。

若狭湾側の街々ではまだ上昇気流が強ないので雨やミヅレの粒がやや大きいが、丹波を越えて京都に達する頃は弱い驟雨となつて街まちを濡らす。

百人一首で有名な歌人、藤原定家の隠棲した時雨亭が京都北部、小倉山にある。山深い庵、枯れた木々に時雨がかかり濡れる有様はまさに風情そのものである。「定家は流石に、風土をわがものにしている。さつと降りかかるては消え

る、時を定めぬ雨が山路を濡らす隠棲の地を時

「雨亭とは」と主人公の一人語らせた中里恒子の『時雨の記』の一節である。

「時雨だわ、さあつときて、さあつと過ぎるわ」

「時雨か」壬生へ、堂の下には入って、煙るような細い雨が、松の葉を光らせて消えてゆくのを見つめた。多江の髪の毛が濡れて、油のように光った。

功成りとげ初老にさしかかった主人公の男が、

夫と死別した女性と時雨のごとくはかない恋に身を焦がす、しつとりとした大人のひそやかな恋の物語である。やがて男が急逝し、追憶の思いを胸に以前訪れた時雨亭を再び晩秋に訪れた主人公の多江が、晩秋の古都には、時雨と鮮やかに色づいた紅葉の風情のなか、追憶と惜別と新たな出発を歌う。

今ひとたびの逢うことも

なくてそもそもみちじ散りにける

時雨にそもそもみちじ散りにける

時雨は、「し」「ば風」「ぐれ」は狂で、風にともなつて忽然と降つて止む雨とも言われている。時雨のもつしつとりとした深い哀切な雰囲気を縦糸に風、横糸に「狂」という激しさが織り込まれているように思えてならない。政争に明け暮れる現世を浮島のように眺め、虚無を感じ、身分違いの高貴な人への思慕を断ち切つて

の出家した西行は、木枯らしが舞い狂い、その後にやつてくる波状的に、そして静寂さが繰りかえす時雨を草庵で眺めながら、縦糸と横糸の絡み合う現世を超然としたのだろう。木枯らしとともに、冬の先触れとなる時雨が遅ればせながらやってきて、幾度となく時雨が繰りかえされ、やがて山のほうでミゾレが雪に変わりあられ（霰）が混じながら、里におりてくると冬の到来である。

(一〇〇四年)